



若い俳人たちの超結社の研究会の話は屢々耳にもするし、なかには然るべき成果をあげているものもあるようだが、反面長つづきせずいつのまにか拡散消滅しているものも少なくないようである。しかしそれでも若い俳人たちのそうした動きには、沈滞した俳句界の現状に何がしかの刺激を与える働きがありそうに思えて、わたくしは心惹かれている。

若い俳人たちのこうした動きは、別の言い方をすればわたくし的集団のわたくし的俳句活動である。ここでことさらにわたくし的とことわるのは他方におおやけ的・公的な存在があるからであるが、それが俳句結社であり全国俳句大会の類である。主宰者や選者を頂点として成績による序列化が行われ、縦系列の確定している俳句組織には自ら一種公的な性格が備わってくる。これは一般社会に於いてもそうだが、趣味の世界とはいえ俳句界もまたこの原則をま

ぬがれていない。これらの公的な性格と関わりないものがわたくし的集団・わたくし的活動である。ここに一つ何とも未成熟なわたくし的活動体がある。これも近年よく耳にするインターネットを介してのものが、この活動体の特徴はメンバーが既知の顔見知りでなく未知の不定多数だということにある。しかも作者名以外の個人情報はずみずみ出入りにも制約がない。

これは一人の若い俳句愛好者がキー局になって運営しているのだが、彼は世話役に徹して指導的な素振りは一切見せていない。ただ参加者同士が作品とコメントを通して共感と反論を交換し、勝手に何らかのものを心に加えているだけである。俳句の約束についても当然有季無季入りまじるが、それもしばらくするうちに自然に解消し、今は有季定型が暗黙の約束になっているという。発足以来二年、参加者も毎回十人から十二、三人という星雲以前のガス状の

活動体だが、その純粋なわたくし的性格ゆえにわたくしは興味をもってこれを眺めている。

もう一つ今度はまるで方面違いの例をあげる。わたくしの母方の叔父は宝生居柳燕と称する所謂旧派の宗匠で、藁葺母屋のやや広い表座敷の床の間には常時和歌三神の軸を掛け、その前の文台には小さな芭蕉の木像が祀ってあった。しかしこの叔父が宗匠の顔をするのは東京府下多摩地区としての然るべき俳句大会の時くらいのもので、ふだんはそれとは無縁な植木屋の老爺の顔で通っていた。

五、六人の出入りの職人が一日の仕事を終え、誰言うもなく発句でもやるかとなると、それに近隣の数人が加わって句座が開かれる。しかしそこでも叔父は一介の発句好きで通して宗匠顔はしなかったという。無論面倒な理屈や批評は一切抜きである。少々の酒なども用意されて談笑裡に一日の息抜きが進む。その仲立ちが発句だった。

これこそまさにわたくし的集団のわたくし的活動に他ならない。戦後は急速に様相を変えてきたが、それまでは各村々・里々に発句の宗匠がいた。わたくしの居住地区内にも四、五人の宗匠のいた形跡があり、わたくしはかつてこれらの宗匠の旧居を訪ね事蹟を知る古老から話を聞いたことがあったが、その横顔はおしなべて地区内社寺ゆかりの俳句大会の場に於いてのみ宗匠であったことは前述のわたくしの叔父と変わりがなかった。要するにほんの五、六十

年前までは各村々・里々にわたくし的俳句集団が存在してわたくし的活動を行っていたのである。

話は飛ぶが正岡子規の俳句革新の際、子規は所謂月並俳句を厳しく批判したが、ここで見落としてならないのはその時点で俳句に関わっていた愛好者は大部分が旧派の作者だったということである。正岡子規の批判は所謂月並派の公的な部分に対するものが中心で、一般愛好者のわたくし的な俳句活動までを咎めるものではなかった。子規の批判の在りどころと一般愛好者の実態とを一絡げに受け取ってはなるまい。事実前記のわたくしの叔父も自らを蕉風、新派のそれを書生俳句と呼び分けながらも、実際には「ホトトギス」風の俳句も遺しているのである。こういう地区内の宗匠たちの在りようからも、わたくしは、正岡子規の俳句革新もその実働部分に於いては村々・里々のわたくし的集団の暗黙の支持に負うところが少なかつたという推測を捨てきれずにいるのである。

いつの時代のいかなる集団にあっても、その公的な性格に刺激を与えるのはきまわってわたくし的集団のわたくし的活動である。実態も実力も未知不確実な活動体であっても、それがわたくし的である限り、そのゆえをもってわたくしは注目してゆきたいと思っている。